

【最優秀賞】

北方領土問題を未来へつなげるために

札幌市立厚別北中学校

1年 藤井 淑希

僕が住む北海道では、北方領土問題は身近な問題として教わりました。小学生の頃、北方領土について調べたとき、僕はまず、日本とロシアの間に大きな考え方の違いがあることを知り、とても驚きました。日本は、昔から平和的な話し合いで国境が決められてきた歴史を大切にしていて、国際法に基づいた領土の決め方を「正しさ」と主張しています。でも、ロシアは、第二次世界大戦の結果として領土が決まったのだと考えていて、その真実こそが「正しさ」だと思っているようです。まるで、お互が違う辞書を読んで、違う辞書を信じているように感じられました。

でも、一番心を動かされたのは、元島民の方々の話でした。戦前に故郷で暮らし、今も帰ることができずにいる方々がいることを知って、僕はとても胸が締め付けられる思いがしました。テレビで、遠くから故郷の島を眺める高齢の元島民の方の姿を見たことがあります。故郷に帰りたくても帰れない、お墓参りすら自由に行えないという状況は、どんなに辛いだろうかと想像しました。この問題は、単なる国と国との間の領土争いではなく、一人ひとりの人生や家族の歴史が関わる、とても大切な人道問題なのだと強く感じました。そして、元島民の方々が持っている故郷の記憶や思いを、僕たち若い世代がしっかりと受け継いでいくことが、とても大切だと考えました。

最近のニュースでは、ロシアとウクライナの戦争の影響で、北方領土問題の解決がさらに難しくなっていると聞きました。これまで続けてきた交流事業も止まってしまい、ますます遠い存在になってしまったように感じます。正直に言って、この問題がすぐに解決するとは思えません。国同士の関係が冷え込んでいる中で、話し合いを続けるのはとても大変なことだと思います。

だからこそ、僕たち中学生ができること、そして僕たちにしかできないことがあると思っています。それは、この問題を「遠い国の昔話」にしないことです。学んだことを忘れず、元島民の方々の声に耳を傾け、この問題に関心を持ち続けることが第一歩だと信じています。たとえ政治的な解決が難しくても、人々の心と心のつながりは決して途絶えさせてはいけないと思います。北方領土の歴史や文化について学び、友達や家族と話し合うことで、この問題に対する意識を広げたいです。

将来、僕たちが大人になったとき、対話の扉が再び開かれる日が来るかもしれません。そのときに、この問題についてしっかり考え、行動できる人になるために、今できることを少しずつ続けていきたいです。そして、いつか、元島民の方々が安心して故郷の土を踏むことができる日が来ることを、心から願っています。